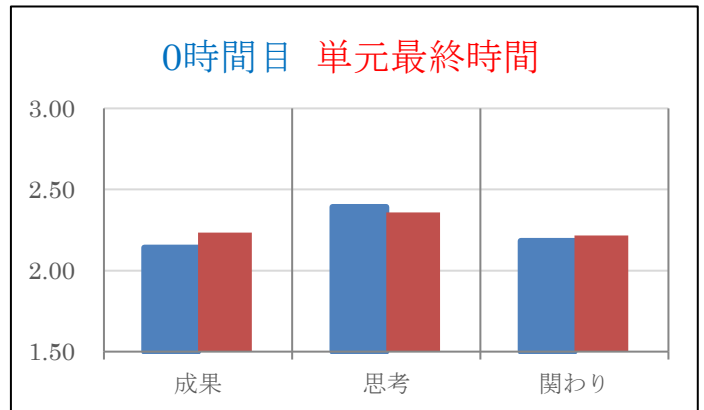
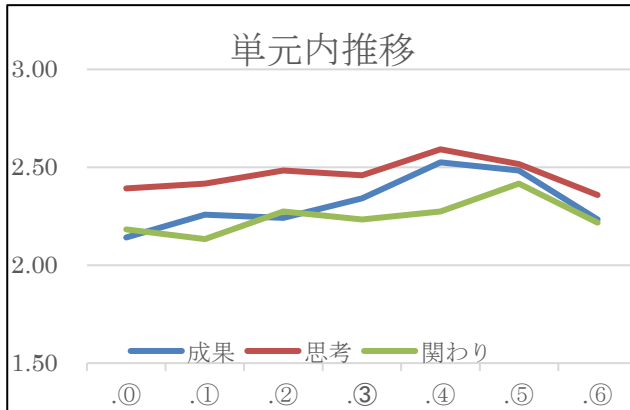


1 単元名 1・2の3でくるりんぱ!～倒立前転～

(器械運動・マット運動)

2 児童の変容

(1) 情意面 (形成的授業評価をもとにした授業評価から) 男子15名 女子15名 計30名



- ・「成果」は単元前よりも高くなっている。児童にとって目標とする技の難易度がちょうどよい設定で、それぞれが自分の伸びを感じることができたのだと考えられる。また、4、5時間目には高い数値を記録した。これは、単元後半の課題解決学習において、一人一人が課題を解決するために試行錯誤した結果、その時間で少しでも技能向上を感じることができたと考えられる。
- ・「思考」は単元前よりも単元最終時間の数値が低くなった。最後の時間は自身の成果の確認する45分だったため、思考の部分では数値として低くなってしまった。しかし、3～5時間目の思考をグラフで見ると、高い数値が続いていることがわかる。これは、自身の課題解決学習に取り組んでいた時間である。自分のレベルや課題に合ったためあてを設定して取り組んだことで、意欲的に活動することができ、自然と思考しながら課題解決に向かうことができたことがうかがえる。
- ・「関わり」は単元前後で特に変容は見られなかった。5時間目に高い数値を記録したのは、積極的に自分たちの課題が進んだり、学び方に慣れてきたりして、自然と友達同士の関わり合いが生まれてきたからだと考えられる。

(2) 技能面

	倒立前転		
	できる	もう少し	できない
単元前	5	17	8
単元後	14	10	6

- ・単元前と比較して数値の上昇が見られる。ドリル運動の中で、ゆりかごやかえるの足うち、キリンを毎時間取り組んだ。このことによって、着手や目線、足の振り上げなど、倒立に必要な感覚を養うことができた。基礎感覚の向上ができる児童が増えた要因の一つとして考えられる。
- ・単元の中盤では、自身の課題に合わせた場を選んで、スモールステップに合わせた練習に取り組んだ。自分の課題と向き合い、友達と関わりをもちながら取り組んだことで、段階を踏みながら技能の向上を図ることができたと考えられる。
- ・できない児童の数はあまり変わっていないが、腰や足を上げる高さが高くなったり、片足はしっかり上げることができたりと、成長が見られた。
- ・今回の単元を通して、個々の能力の差が激しいと感じた。逆さ感覚や腕支持の力など基礎感覚の部分で差が出てきていると考える。コロナ渦に入学した児童たちで、低学年の2年間は運動遊びで養うべき感覚が例年より養うことができず、積み重ねの部分での要因も考えられるのではないだろうか。マットに限らず、器械運動の中で様々な感覚を養うことができる活動を取り入れて活動を行っていくことが大切だと考える。

(3) 思考面

問 倒立前転ができるようになるために、どのような練習や取り組みが必要だと思いますか（しましたか）。（複数可）			
単元前		単元後	
・倒立ができるようにする	7	・補助倒立をした	1 5
・壁倒立をする	3	・倒立の練習をした	1 2
・肘を伸ばして支える練習をする	3	・親指に力を入れて体を締めた	8
・前転の練習をする	2	・補助倒立から前転をした	7
・倒立と前転それぞれのポイントを練習する	3	・壁倒立から前転をした	3
・かえるの足うち	2	・かえるの足うちやきりをした	2

- ・倒立前転の知識が定着し、技能ポイントを踏まえた取組や学習についての記述が増えた。児童が技能ポイントを意識し、自己の課題解決に向けて必要なことを考えながら学習することができた成果だと考える。
- ・課題解決のための具体的な取組の記述が増えた。練習方法や場、意識するポイント、友達との関わりなどについての記述の量が増えた。単元を通して自己の課題解決のために必要なことを意識して選んだり、考えたりしながら学習することができていたことがうかがえる。

3 成果と課題

高学年のめざす姿

課題に対しての自分の考えをもったり、仲間と試行錯誤したりするとともに、解決する場や方法を伝え合う児童

【成果】

- ・学習カードに毎回めあてと振り返りを記入した。そこには、各自目標とする姿や次回取り組みたいことを記入した。教師がコメントを毎回入れてやり取りすることで、自分の課題に対してどのような取組をすればよいのか考えることができた。
- ・技のフローチャートをすべて児童に渡し、資料を見ながら自分の取り組みたい技に挑戦した。資料があることでポイントを理解した状態で、技に挑戦することができ、有効だった。
- ・スモールステップ表を活用したことで、自分の実態や課題が把握しやすくなった。それをもとに、次のステップに進むための練習方法や場の工夫、仲間との見合い、補助など自分に必要なことを選択し、課題解決に向けて取り組むことができている児童が多かった。自分自身を客観的に見て現状を把握し、課題解決学習を進めていく上で、スモールステップ表は重要であると考えられる。
- ・単元前半に、学習の進め方や資料の活用、技能ポイントの確認などに取り組むことで、学習の骨組みを理解して進めることができた。後半は似たような課題を抱えている者同士でより具体的なアドバイスや支援をすることができている児童が少しずつ出てきた。また、一つの技にだけ取り組むのではなく、自分ができるようになりたい技に進んで挑戦する時間を設けることで、倒立前転がうまくいかない児童も意欲的に取り組み、友達との関わりをもつことができたと考えられる。

【課題】

- ・技能ポイントに着目し、意識しながら練習をするために、できている理由やできていない理由を考える発問や活動を取り入れたが、児童が「わかる」＝「できる」になるための有効な支援をすることができなかった。「大事なポイントはわかっているのだけどできない、どうすればよいかわからない」という児童に対しての支援策を考えていきたい。
- ・自分の課題に合った練習の場を選べるように、場の設定をしたり、児童の様子を見ながら臨機応変に場を変更したりすることができたことはよかった。しかし、活動の中で友達同士の関わりが希薄になり、自分の活動に夢中になってしまう場面があった。それぞれが資料を基に対話をしてほしかったが、資料を見ながら取り組むことに慣れておらず、児童にとって有効な学習形態ではなかったと感じた。有効な支援方法を講じていきたい。